

者也ト答名ヲバ誰ト云ゾト問ヘバ、男怪氣ニ思テ、左右ナク明サズ、兎角誘ヘ問ケレバ、紀介トゾ名乗タル、高綱ハ、ヤ、紀介殿此河度ン程、御邊ノ馬借給ヘカシ、紀介、叶候ハジ、遙ノ市ヨリ重荷ヲ負セテ歸ランズレバ、我モ勞テ不乗馬也、又今朝ノ水ノツメタキ事モナシ、唯渡リ給ヘト云、紀介殿、タ、借給ヘカシ、悦ハ思當ラント云ケレバ、紀介思様此人ノ馬ノカリヤウ心得ズ、歩徒<sup>カチ、レン</sup>ニテ誰共知ズ、我身ダニモ合期セヌ人ノ、何事ノ悦ヲカシ給ベキ、去共借サズシテ惡キ事モヤト思ケレバ、借テケリ、高綱馬ニ打乗、此馬コソ早我物ヨト思ツ、空悦シテ野洲川原ヲ渡ツ、鞭ヲ打テゾ<sup>ア、エ、</sup>涉セタル、

〔十六夜日記〕いまだ月のひかりは、かすかに残りたるあけぼのにも、り山をいで、ゆく、やす河わたるほど、さきだちてゆくたび人の駒のあしのおとばかりさやかにて、きりいとふかし、

たび人はみなもるともに朝立てこまうちわたすやすの川霧<sup>○又見玉</sup>

〔海道記〕貞應二年卯月の上旬、五更に都を出て、<sup>○中四日略</sup> <sup>○中三上</sup>の嶽をのぞみて野洲河をわたる、

いかにしてすむやす川の水ならんよわたるばかりくるしきやある

〔小島のくちすさみ〕やす川とかやを渡るとて

いつまでと袖うちぬらしやす河の安げなきよを渡りかぬらん

〔富士紀行〕やす川にて

我君の御代にあふみぢけふもはや渡る心ややす河の水

〔新勅撰和歌集<sup>十九</sup>〕伊勢の勅使にて、甲賀のむまやにつき侍ける日、

後京極攝政前太政大臣

はるかなるみかみの鳥をめにかけていくせ渡りぬやすの川浪